田口卯吉著

日本開化小史

卷之六

史学
帙號 一五
記号
層號 六
滋賀縣中學校

四百二十一号
広三四
210.1
S12
Vol 6

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版

日本開化小史巻の六目録

第十二章 文學進歩の景況

文學貨財の進歩常に小遲速あるも雖も大体小於
ては併行せ
二千四百年代の文運と撥乱反正二千五百年代の
文運ハ守成修補
封建開化の性質（上下懸隔重族）
社會と自ら救治を為す
社會の發達は草木の發達の如しこれを發達せしむ
るの方法觀やそ

第十三章

徳川政府に不利なる勤王心の發達

謀反の口實

忠義心は封建制度に利かるゝ為めに發達せ

忠義心大に發達して徳川政府に不利となる

歴史と和學と儒者と勤王心を鼓舞す

勤王心と徳川氏を倒そふ思ふ者と倒そ外寇に

愛國心の勃興

徳川政府、天子の詔を以て開港せんと欲そ

此策成らざるを徳川政府之を專決そ

諸侯の志士天子を奉して攘夷を行はんとそ

御上洛の失敗

各地騒擾

長藩を討して勝たず

將軍政權を奉還そ

將軍恭順謹慎

輿論抗そべからそ

外交一旦開くときそ徳川氏の制度復た維持

すべからす

蔵閣

日本開化小史巻之六

田口卯吉著

第十二章 徳川氏治世の間に世に顯はれたる開化の現像

右の如く外物の有様進歩せしかば心裡の有様亦發達せざるを得ず其景況左の如し

文學の概況

戰國の時に當りて下野に足利學校あり相模に金澤文庫あり京都に五山（南禪寺東福寺天龍寺相國寺萬壽寺）ありて文學を保護せり足利氏若くハ管領家の補助を得て若くハ自家の所領ありて維持せしも此と見えたり固より武人も戰爭に暇なく汎を文章の事ハ久しく僧侶の司る所となりて宣戰講和の文より平時の交際に至るまて皆圓顱の人として之に當らしめたり猶中禪理尤も社會に行はれて孔孟の道を殆んと跡を絶ちて凡そ社會知識あるものハ行為ハ無識者の學ふ所なきハ武人多く僧侶を學ひて圓顱の人さふう英雄豪傑と云ハるゝ程の人も緇衣念

佛法の人多し時に社會の文運地知識も多く稱せられ僧名を雖も

物事を當時の書籍に渉り

の新撰荒頻歌の連俳行なふ唯事を記述

草井頑蛙の抄類社を記す

出藻塩祇

國久阿の波の時宗の碑の

學臣少二氏

文豐の識見之いを能と詩歌の士

田章知つ文其旦て感て概ね其と想像能と述ふ連ふ俳就亦

而後織

故せ弊のとて見て

ふりひあ

英雄豪傑の

く出き

進で

歩を淨せ瑠璃も

彼時代に出て

文と章見え

此時世に

幽齋松永貞德の下に長蘆皆歌學川

細

繁敏此時の書講究藤原惺窩

孟著

讀書

初て紗

唱へ程朱の窮理盖

支那宋開士敦頤程子の性理を

學大國

周

程

顥

孔

子

格

物

致

知

の

注

文

請

理

釋

研

究

我國後

此

傳學

盛

行

窩

氏

終

德川氏の發達せはるべ

文運未た此の如く速に發

足利氏の駅を失せし

海内鼎沸の人心

醫學

用ふ

醫家亦

道藝

宋

方等と

奉

專ら

造詣

恒徳

雲林

諸家

治を

效

亦て

醫學

國名醫傳

國の

運亦

容

至

我

定り

ふ

至

此時

亂

斯

ふ

蓋

て

之を奉せ

國の

運

容

ふ

蓋

て

之を奉せ

二千二百六十三年より二千三百年
將軍 家康 秀忠 家光
年號 慶長 元和 寛永

朱子學

惺窩の弟子林羅山徳川氏に用ひられ大に程朱の學を弘む羅山博學強記にして著書數百部あり石川丈山詩を能くし我國中興の詩宗と稱す堀杏庵那波活所林羅山松永尺五を稱して四天王と云ふ朝山意林庵五山の長老に學び後に儒と爲る皆宋儒の説を奉じたるものなり

王陽明學

近江の人中江藤樹王陽明全書を得て大に喜び始めて其説を唱ふ王氏の學是より行はる藤樹篤學にして品行方正なり世人稱して近江聖人と云ふ

醫學

曲直瀬正慶の子正紹正紹の子親純三世相續て家聲を隆くし一時の俊才多く其門に出づ各圓評の書を著撰し金元の醫風靡然世に被ふり岡本一抱に至り更に詳密を加へ陥士蒙生と雜る皆能く醫鑄と解を其功偉なを是を丹溪少と云ふ蓋し明の朱丹溪の治法を奉ず象ゑ故所り皇國名醫傳岡本一抱を二千四百年代の人なれども今ま文の續き惡しきゆえ稱〻記入す

二千四百年代
將軍 家光 家綱 綱吉 家宣 家繼 吉宗
年號 寛永 正保 慶安 承應 明暦

朱子學

林羅山の子春齋其子鳳岡亦朱子の説を奉し徳川政府の儒官と爲る其學愈盛なり是時に當りて土佐に野中兼山あり備前に熊澤蕃山あり皆經濟を以て世に名あり江戸に由井正雪山鹿素行あり共に軍學を以て著はる此四子く二千四百年代の初めに當りて各一方に振ひしが後穢そして尋常律書の人にあちゐ益し所講古儒なゐも此徽其宋儒の説〻於けこ必をしも類く奉せを山鹿素行聖教要録を著し程朱を非とし蕃山の集義和書外書大學或問等頗る卓見多し思ふに久しく戦亂の為めに壅塞せられた

き日本の智力富に至りて始めて勃興し及ふら氏ゞ其後宋儒の學齋よ崎人ふな之ゞ今其崔ふがらの依學々ん山闇闇齋木下順養貝原益軒藤井儒齋仲村陽齋益井持軒五井蘭州の葉皆碩學大儒を以て稱せらる而して其著述亦多し此時明の人朱舜水我國に来り水戸に聘せらる水戸義公光國學を好み和漢の書を集めて以て學問を獎勵す水戸の文學是より盛んなり是よりして二千四百年代の末に至りて是等の子弟の顕へうゝそ只甚多し闇齋門人に三宅尚齋佐藤直方淺見絅齋木下門よえ新井白石室鳩巣雨森芳洲祇園南海榊原篁洲水戸に於て安積澹泊齋三宅龜

萬治 寛文 延寶 天和 貞享 元祿 寶永 正德 享保 元文

圖皆朱學を奉す

復古學

斯く漢學旺或ふかきて心
を來註ま生くもれあきと
き ら其間又異論の發そは
は勢の然う|むコ所なり
此時ふ至りて伊藤仁齋始
うて復古學と京師ま唱ふ
其言ふ曰く性理の學を孔
子の主意ふあうそ程朱寺
佛説之容きて孔子此説を
補ふ是れ大ふ深まれり抑
ㄹ孔子の言ふ所あ性と教
と徴兼有コらのふり宋儒
の學性とㇳて學間の全體
となせり大學く孔す此遺
書まあうす明現止求冲漢
無朕體用一源等の寵皆佛
老の諸辨ヨㇾて聖人の意
まあらをと其子東涯蘭嵎

其弟子並河天民等大ニ其
説を鼓舞す與特物徂徠出
て始め宋儒の説を|春|て
護園随革と者|ㄷ齋の復
古學を駁|たま|か其後
李三明の人王世貞李攀龍
の書と讀ろ大ふ感|書く
舊學と廣てヽ古代の文辨
と治り益ミ宋儒の非と知
れり因て歎|て曰く豈唯
我のミなうんや治ミろう
ふの天下皆是ふり豈作今
曰のみれらふや子古ㇲ来
音是なり乃ぶ論語徴術道
辨名學則寺の書と者|宋
儒と痛擧|悪法茂識議|
務かて門广とゞてり其弟
子太宰春臺安藤東野山縣
周南服部南郭平野金華鳴
島錦江の徒徒ひて之を鼓
鎌|海内一時之う為ふ風
鹿を平安の字士齋同士朗

又一家説と立つ宋儒の學
之より攘ふ

經濟學

熊澤蕃山の大學或問物徂
徠の政談太宰春臺の經濟
録寺治役世經濟學と称そ
つもれヽ一經ふ法日すぶ
もの あ宝新井白石の折焼
紙の記れ貨幣論中最も感
服をへききのあま

開化史

白石の卓見なふ深く社會
の理ふ注目をる所あま讀
史餘論と着|日本古来政
府興廢の理と述ふ後世史
家其餘澤を業ゝ少うふそ
蓋|當時の文運と飾きふ
乏きの一書ぶう

和學

此時ま至りて和學亦進め
り下河部長流大段まあを
て一十四百年代の始め早
く既ふ萬葉集源氏物語等
と註釋|古代の言語文草
と研究せり之ふ次さ傳契
冲長流の親交なりとさ大
ふ此學と典せり件萬讀曰
く此師の歌學歌昭海楠の
読と掃そ|て古書と見明
らか|らのと亀は|凡を
進世の人唯く中川れ流の
説ヨあらされを道の言ふ
あらすとを是ふうなて通
まく傳ふヨう道ふうとい
ぶ説さへ逆被ヶ此師此關
を透過|一事一語徴を古
ふまま具中或ひを過本及
なくしもあらされと一左
ひ此道開なてあそ是ヨ次

東京帝国大学蔵書

俳文

狂言作者

其年暮の次の年番附作者名を書くせたり是まで見の世遺者故延宝八年
ふ安倍三郎左衛門金子吉右衛門達世ふ名高し和泉太曲類纂江戸名所
図会清兵衛作夫も浄瑠璃作者なり岡清兵衛等の事なり

又た岡清兵衛等の事は平鬼を専らふ著けり金平節と云ふ節は
平鬼の項に金平最後の題金平獄細事を詳かにせり金平節は享保
元文の際名を流行せり

醫學

李朱の醫道其後一変して直ちに重宗の時に至り清川玄道
養生訓を著はす

萬國地理書

新井白石羅馬人及び和蘭人の萬國地勢を問ひ和蘭采覽異言を著はす是れ
地理書の始めなり

是れ於て東山の徒稍々復古を唱へ
而して和蘭を吉益東洞の面目を一変し直ちに
古法家を云ふ

天文學

貞享の頃渋川春海新暦を作り之を貞享暦と云ふ
次で中根元圭西川正休等之を改作し
次で宣明暦を作り
次で寛政暦を作り
次で天保暦を作り
次で天保暦を作り
次で天保暦を作り
次で天保暦を作り
次で天保暦を作り

二十五百年代　二十五百年の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

文章家

雖も其益手際風俗眼底に驚くべきものあり　故に古文の解釈を難とす　文辞を蒐め其用ひ方を巧みに博識の項詩に至る　寛政の頃に至りて江戸

朱子學

然れども文辞を修むるに以て文辞を修むるに以て国前後二王山鳴谷川巖秋洪園皆百本北海梁田蜕庵の学者なり

物井茂卿の学方石宅石庵等の中に懐徳堂の学者あり

院を開き大阪に持

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

復古學

二十五百年代の物語を門を以て説明せんとす　物部氏の時代の初めより足の方に古文辞を修めて其物を以て技とす　古文辞を宇藤東三郎の門に学ぶ

将軍　服部南郭　高山蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲　伊藤東涯　藤井懶洲　鶴峯戊申　熊沢蕃山　伊藤東涯　藤井懶洲　荻生徂徠　服部南郭

吉宗　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家重　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家治　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家府　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

家慶　南郭の弟子に青木昆陽　田中蘭亭　荻生徂徠　藤井懶洲

年號　寛保　延享　寛延　宝暦　明和

所なりと云へり然れとも金峨ハ井蘭臺の部子なて蘭臺朱學を信せす金峨の此説を養す吾蓋し時部の既ふ熟をろも以めでと見えたり原雙桂梁田蛻巌叙平刈南宮大湫赤于衷の説を唱へしもの於り然きとも最も此説の主張し征係春臺等の説我駁せしものを金峨ふ如くハふし次きて山本北山太田錦城の二子書起して之と唱へ最も修碎の奘と痛論し韓柳歌蘇を推して專ら清新流羅平散暢達を主とせり蓋し古文辞以奘を除きしは北山め功居多ふして經義の明聯はふりしそ錦城の功居多な宝中井積德夫仮ふ裕り文韋を以て鳴言其後諸家と考窪新表をはを以

て世ふ業名なゟられ朝川善庵安井息軒芳野金陵の輩あり

和學

荷田春滿の姪在滿其子御風徒を延きて敎後を從ひて學ふもれ極りて多し與時和學又後古の説あり加茂眞淵荷田春滿ま從ひて學ら大ふ後古の説と唱へたり和歌ﾄ萬葉集體と摹做し文章亦古言と剰竊を國學者流翁然之ふ無く征保春臺弊日本と称して東東と云ふ真淵之ま激し以為らく我國個と神聖の良道あそ陶虞三代の道入りしまり良道派ふと即ろ儒學を仇視し力遂鳴して之を補擊せり其門藤原宇万

役楫取魚彦本居宣長橘千蔭村田春海等最も顯はる長博學ふして古事記傳と著を其纔有益の著書多し其系于平田篤胤益々和學ま固執し儒佛を併擊せり蓋し莅ま至りて辭見を免うはへからすと云ふ然れとも我国文典の開けたるく實ふ数于の功ま國まなり伴蒿蹊京師まあてて韓ら著作を事とを卑見顧ら多し村田春海加藤千濃真後江戸の二宗丘と称せらら春海心我漢藉ふ潜め加茂氏の道ま す は跨を信せを思へらく我國太古道とすゑ所ふし文字制度らう衣服飲會等ふ至ろまて皆之を文那ま取ろ和學者なろゟのは儒ましく本朝の典故言辞ふ道そはおれふ

か故ふ周公孔子の道くすそ所の飾か道おをへまふし而して中古以來佛ホ大ふ行ハ我ま康于假思と本を故ふ二道を将道い而して道を立代ろ我之我開ろはまな全今代和學者我所刷ふ道かき色船う學強附會妾りに滅古史と引き人を欺き已を欺く云く

作文並ま狂文

二于五百年代ま巫か旅蕉文亦大ふ進むものあて尾張の人廣井也有徳是も門鶴衣浦以海等と著ま衛鐘り作文左立てたり其体追ふ蕉門の諸于ふ勝色て弥なゑ茂覺ゆ文東都まハ鳳來山人平賀源内蜀山人太田南畝六樹蓄石川雅望喜三二（平澤）天壽等の才士出

世と自在ふ文章を舞詩一
等以新体を案出す其才驚
くべきものあり

小説

元禄の頃浪花に西鶴あり
数多の戯文を作り雅懐出たを
り小説を迷ふ島其筆
を賞保ふ世情を江
ら頗る近松を小説家
の見歌行も舞伎狂言
は浄瑠璃若し雖
て出ら想像天を賦
り終之に次説き基馬礎琴を出立

京文化専作

大に更に人情を磨の功を積
て婦女の専ら草双紙を時に柳
亭種彦の著す新の閑人隠人
春水の三馬を滑稽を
永脚色武亭文学致
す色を作り為
て見る

漢方醫學

古法言家を人等の命を守り学流を
泛ふ是投薬の攻付徒
京田師東郭福井人楓天草明菅原寛承政台の川滞至下
多和紀蘭愚溪古梅余陰雨折先生温

涼を補瀉偏執る所
従前の酒幣一先て殆ふ
んと盡く（皇國名醫傳）

西洋醫學

和蘭の学亦此時に至り桂齋
開け前野蘭化杉田玄
川南周長崎寄の通辞
和蘭の解剖書を講究
川榕菴と共に蘭
剤書を講究せり

理化學

青地禮宗氣海觀瀾を著
宇田川榕菴密開宗を著
り皆実験に基き
て今日の学者猶之も
れを依頼

天文測地學

麻田剛立望暦学を研究
て夜晴を測
り其測験
合せ書を
抽き
九年
大後
十余
年間
其法
を別
に
大
伊
能
忠
敬
東
西
南
北
を
測
量
し
て
日
本
全
図
を
作
る

狂言作者

書を讀む
験を
書を
研究
九年
大後
十余
年間
其法
を別
に
大
伊
能
忠
敬
東
西
南
北
を
測
量
し
て
日
本
全
図
を
作
る

古今役者大全
て記ふ名江作戸
のふ曽は頻作津
出ふ中の中へ
平を平國半流兵衛
を出ふ名郎の
祭を付徳ふ田三引演ふ嘉入兵衛
屋敷ふ中たい北中の川の
簡恩屋
作家最い者員ふ呼受右衛門
大阪ふ作家最い者員ふ呼受右衛門
て見ふ藝大狂へ上ん衛と右及く衛門
ゆやとと入言工町て門今衛いみ十
並べうて成大を夫組狂とは門かた名郎の中頻ふ全
本さとあた評あをふ言て嵐俳ふるを助五へ作津ふ曰
總かいてを判みは勝を座新名仕慶成郎於れ打く
助先ふ中今北けた仕本平緒大國へかを花一治く近
はは時ふ暑ふ黒ふくのい同阪のて平國半流兵衛
志京江て今姉ふ赤ふみ最まとふ了の野姓七太衛

ふ村てと代助の人阪以ふ本言な小作りの實（華曲類墓）竹田三月出雲清定
任座作名狂の狂吾豊前ふ十ふを出を自座称ら元一年墓）竹田三月出雲清定
言ふうを宮作冊妻竹享て柳出（假）雲称ら元一年墓）竹田三月出雲清定
にてう出ふは雄慶保一の雲名を浄と酉ふ璃を享作保竹雲清定
大鎧へ　そて形商十世三掾手云は璃も璃を以作作保竹雲清定
岸櫻同名大小並れ掾への人と本ふも璃を以作作保竹雲清定
宮故せう岸栗木切座年出に三忠を以作作保竹雲清定
内郷年浅由横宗ふふ田来て好臣清頻作保竹雲清定
の郎卯江良山助忠て十ふ作松藏定るつの本の清定
役と春戸之の同臣義用りを各のう多其項意定
澤い中ふ助時文金裕大其所或任男住は居く

村又く談部中七十大十元ふ大歳二嵐以賀ふ作ふ
宗此市大勅村十郎業作年の阪月来廢源内ふて世上に渡行れぬも
十年村岸郎十大長意展竹津月五歌舞座内ふ赤た（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
郎津座其宮太本岸七の本瑞座璃日郎座興行と（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
之忠内郎外宮へ伝月本座璃日郎座興行と（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
治臣の延題元言ふ出ふ歌て動ふ行と（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
蔵兵後座内元ふ来名来手動ふ夫と（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
術い坂四年来のを手本と村と同ふ夫と（福）瑞璃外（平）作神霊矢口の渡行れぬも
の東京大沢村矢宗数都三軍彦は作

表中遺漏尚ほ多し後の人此書を以て棄つべからざるを為さざる能はざるは補ひ

以上の二表は徳川氏の時文學の進歩と貨財の進歩と併行せしことを知るべし然れども其間貨財先づ進みて而して文學之に續きしものあり文學先つ進みて而して貨財之に次きしものもあり又其時代に就きて考ふるに貞享元禄の時代まで其進歩の勢最も遠ふして其以後少しく遲滯し又更に文化文政の頃に至りて次第に増進の勢を示すに蓋し社會事物の整然たりて一列を為さず進行すること社會の理ふりと雖も其細目に就きて査察すれば未だ必ずしも小遲速なくんはあらざる然れども此事獨り社會の理に於てのみ然りとなすべからず凡そ外物の理を仔細に講求せば皆此の如きものあるを失れ惑星の大陽を廻るや速心力と求心力との關係に出づるものなれば其行道を必ず真圓を為さべしとなす思ふべからざる然りとなす其行道全く楕圓を為せり燈火の滅するや油の盡くるに因るものなれば次第に暗くなるべしとなす思ふべからざる然りとなす其滅するに臨むや却て明光を發するが如き類れ事物理に於て極めて多し皆力の一樣ならざるに基づくものなれば則ち社會の進歩も亦理ふりと雖も其進歩に緩急遲速あるべき勢の免れざる

所なるべし。是れ則ち德川氏の時貞享元祿と文化文政との時とに於て最も隆盛を見る所以ならん。然れども其全体の成跡を顧みれば足利氏季世の淺き有様とまさに德川氏の燦爛たる開化を發きり社會進歩の理亦明らかならずや。蓋し此等の進歩は常て政府の保護を因らず又常て外國開化の助を藉らず全く日本社會の内に於て自ら進みしものなり。後の世の國事を憂ふるもの此二表を熟見せば或て以て干渉保護の迷を解かん歟

蓋し二千四百年代の進歩は人目を燿燿たるものあり儒者に於ても其俊才ある熊澤了介、物徂徠、新井白石等の人あり俳諧に於ては其巧妙ある芭蕉其角等あり佛に於ては其深奥なる深草元政の如きあり狂言俳者に於ては其新機軸を發せる近松門左衛門岡清兵衛の如きあり浄瑠璃に於ては即ち竹本義太夫の如きあり役者に於ては初代團十郎の如きあり皆英邁豪傑の資あり長く後人の尊崇を受くるの人なり其貨財上の進歩も極めて著しく共に前表に就きて見るべし蓋し二千四百年代の進歩は我國戰國の為めに久しく壓下せられたる文運の太平の時雨を得て俄に勃興したるを如き觀を示すものあるに反し二千五百年代の初めに當りて此等の諸子死亡の後を文運稍遲滯の姿あるを

雖も其末ふ至ては更に駁雜の勢を以て第二の進動を現せり儒學ふ於ては早く折衷は學出て舊時の固陋ふ諸説を排除し終ふ山本北山太田錦城中井竹山佐藤一齋賴山陽安居息軒の輩見識と文章とを以て一時を風靡するものあり和學ふ於ては加茂真淵本居宣長村田春海の輩ありて古代の事實を探くり語音を正せり天文學ふ於ては麻田剛立伊能東河金子半七郎の輩ありて深く天空の外を探くり小説ふ於ては京傳馬琴ありて文筆の巧技ふ誇せり俳文ふ於ては亦有狂文ふ於ては風來蜀山の輩ありて一種の新文体を起せり皆博識ふして新機軸を出せし人なり其他貨財の進歩せし

もの亦極めて著し今特ふ此等の人物ふ就きて品評を下さんふ讀者多くて二千五百年代の諸士を以て二千四百年代の人物ふ劣れりと為さん歟是も蓋し其事業の人目ふ著しきものあるが為めなり開化の度ふ至りては二千五百年代を以て優れりと云ふべからず蓋し二千四百年代の諸子も皆創業の人なり其爲ふ所多くて文學上の撥乱反正ふ力ものあり故ふ功名人目ふ著し二千五百年代の諸子ふ至りては其餘を受けて其業を去り其美を勸め以て能く社會ふ適合せしめたり故ふ其功名前者ふ及ばずと雖も其智識ふ至りては遥ふ之ふ超ゆるものあるを云はざるべからず殊ふ小

說俳文其他此時代に至りて創業せしもの極めて多し文運も決して退却せしふもあらはるゝを抑も文明上の人物を論ずるに時代の一枝の優劣に就きて査察せざるべからず然らば則ち二千五百年代の人何ぞ二千四百年代の下にあらんや斯く一般の進歩に就て査察したるの後更に其開化の性質を略記べし蓋し以上の開化は皆封建制度の下に發したる開化なり故に封建の社會に適當なる形狀を存せり今其理由を述べん抑も封建社會は小國獨領なる所の數多の諸侯あり其次に數多の階級ありて成る所の武士あり其下に商あり工あり農あり農は工よりも固より貧困の種類にして

諸侯は固より殷富の種族なり其中間に立つ所の士と商とは其階級極めて多くして富めるものは王侯に比べ貧きものは農工よりも下まり抑も德川氏治世の文運は斯の種族の需要に基きて世に現はるゝ所なれば其度は相懸隔すること極めて多し故に其讀書に於ては孔孟の書を講ぜしめたるか為めに六經に明るなる徂徠仁齋北山錦城一齋等の如き學士殘輩出せしめたりと雖も中等以下の人民は之を以て産を破るの基と爲し固く之を禁ず僅に商賣往來都路今川の類を以て其教育に充てるに其和學に於けるや王侯富豪は古代

の語を貴重し學士と引きて專ら古事記萬葉集等を講せしめたるを為ふ古辞に明るき真淵宣長の如き學士を輩出せしめたると雖も中等以下の人民を百人一首を以て極度とせり其文章に於ては王侯富豪を專ら漢文代重んじ古辞と解するもの代称揚せしうは之に明るく徂徠南郭の輩を現出せしめたると雖も中人以下に之と解するたふ能はざりき其和文に於ける王侯富豪を古事記あるいは奇古なる語を用ひて文章を綴りを博識とおて尊崇せしうを之に巧みなる真淵宣長の如きを輩出せし後たりと雖も中等以下は平假名の草子に安んせり其画に於ては王侯富豪は賞觀玩味

して始めて能く其趣きを解するき氣意あるものを好みて南州の画專ら行はれ之を能くする者の池大雅の如き我現出せしめたりと雖も中人以下は錦画を以て集樂を為せり其書法に於ては王侯富豪は唐様を重んじ之を能くするは廣澤東江の如きを輩出せしめたりと雖も中人以下は皆御家流を用ひたり其器具に於ける其居宅に於ては其服飾に於ける其他一切の開化に於ける王侯富豪の用ふる所は其度極めて高くして而して中人以下の用ふる所は其度極めて卑し特に其度の懸隔せるのみならず殆と性質を異にせり蓋し社會の平等なるはうを社會の常ふれを尊卑に用ふる所

相異なるを固より免かるを能はざるの所なきをも封建の時代如く甚しからざるべし而して封建を以て太平を致せし事徳川氏の如きを古来各国稱する聞く所なれども苟も封建の組織に於て如何なる開化の發現をなすやを詳ふるは徳川氏の開化を査察するに如くなし今此の如き學士を發生せんと欲するも望むべからず此の如き器物を發生せんとするも得べからず開化の理既窮めんと欲するの其然る所以は於て最も注意せざるべからざるなり中略

且つ更に注意すべきは封建制度の下に於て發するものは皆封建の性質を棄くる事是なり蓋し酒

中に注ぎたる凡ての米は皆酒と化すべし磁石に接する凡ては鐵は皆磁石鐵となるべし封建制度の下に發するの凡ての現像は皆封建の性質を得試みに見よ徳川氏の内制と各諸侯の内制と全相同し各諸侯の内制と各藩士の内制と全く相同し各藩士の内制と各商賈の内制と全く相同し各商賈の内制と各伴頭の内制と全く相同し是より以下連綿として皆同し皆僕隷家来を以て團結して一家を為せるものなり蓋し封建は族を重んずるを以て故に長子を重んし庶子を輕んし假令嫡嗣に愚者あるも雖も綿々として一族を以て永遠に傳へんとの計畫極りて密なり其極や其族

の血脈全く絶ゆると雖も尚ほ養子の法を用ひ外面に於ては更に絶えさるか如く思はしむるものなり是れ固より皆人の天性（避死保生）に於て此の如きを欲するものあるに基くものにして封建制度の下に至りて非常に發達あらさるものと云はさるへからす然後の人仔細に之を玩味せは社會に一定の理ありて種々の制度の下に種々の作用を為すこと能く解するに難からさるへきなり（封建は族を重んずる故に家康の臣は直政忠勝等あしと雖ども其關係は家康と直政忠勝との間に存せずして徳川氏と井伊氏本多氏との間に存するなり故に家康と直政忠勝等は與一たる臣義を直政忠勝ゝ受けたるにあらずして井伊氏本多氏より受けたるなり之れを譬へは井伊氏本多氏の血統絶え他家より其家と継くに至るも徳川氏に對する關係は以前に變にと同きなり此事凡て此の諸侯に於ても皆同し君臣父

子其他親戚の關係に至るまて皆人と人との間に結て族と族との間に結ふものなりされは商人も亦族を以て諸侯の出入となりて件頭も亦族を以て商家の件頭となり其他學士醫士役者職工穢多等凡て皆族を以て社會を立てり）

以上述ふる所の事實に據りて推論すれは凡そ開化の進歩せさる社會の性なることを能知るへし譬へは王朝の時の如く門地の貴賤を論するの弊甚しきときは各地封建の勢を發して以て自由を求め足利氏の季世の如く封建戰國の禍亂に陷るときは終に集合して太平を致さんことを求め既に太平を致し然後に文學あり技藝あり凡百の事に至るまて皆進歩せしめて以て人々の生涯を快樂ならしめんことを求む社會の動く所常に

此の如く英雄豪傑の為す所或々其勢を早め或々之を遲延せしむるに過ぎざるなり嗚呼此理を推して將來を察せば我國前途の事亦豫知するに事を得べきなり且つ夫れ社會の發達は他の有機諸物の發達と異ならず今草木に就きて之を例せん抑も草木の性たるや又保生避死の天性を存するを為めに其生長するや疑ふべからずと雖も之を養ふに種々の方法を以てすれば以て堅靭ならしむべく以て柔弱ならしむべく以て長大ならしむべく以て矮小ならしむべし之と同じく社會開化の發達たるや社會の性なりと雖も之を養ふに王朝の制度を以てするか鎌倉政府の制度を以てするか德川政府の制度を以てするかに因りて文學貨財の風俗人情に至るまで皆異樣の東性を得せしめたり是は由りて之を觀るに社會の制度を立つるも敢て恰も園丁の草木を育するに如き歟嗚呼如何なる有樣を於て草木最も長ずるやを知らば社會發達の如何なる制度の下に於て最も速かるべきやを知ることを難からざる

第十三章　徳川治世の間勤王の氣運發せしこと

我國開化の斯く進歩せる際に於て德川政府の為めに不利なる一元素の發達し來りしものあり其は如何と云ふに王室を尊ぶの氣風大に增進せしこと是なり蓋し德川家康の禍亂を戡定せらるゝや深く王室の將來に懼るゝ所ありしが如く知らるゝに表面は之を尊重するが如くなれども內實は全く之を抑壓したり固より戰國潰爛の折に比すれば王室は一噬の勞も自らせざりしかども衆庶の尊崇を受け數多の俸領をも得たるは事なれども幸福は度々天壤當れらんと雖も人智漸く古來の歷史に徵し是非を考ふるに及び德川氏の萬般の政務を觀るに王室を全く虛位を擁するに如き姿あるに見て王室を舊時に復せんとする志の發するに人情の常なり是れ家康の豫め防がんと欲したる所以なり然れども此心の進歩をなし又一朝一夕の事にあらざりき彼の二千二百九十七年德川三代將軍治世の時肥前島原に耶蘇宗の亂あるに其張本たるべき素と大阪の殘黨にして初めは德川氏の政体を破壞せんとの精神に出でたるものなりと雖も其口に藉きて以て人心を固結せんと欲する所のものの即ち勤王にあらずして耶蘇宗にあり其志姦雄の士其志の成らざるに憤り政府に向かひて手段を試みんと欲するものは必ず輿論の

投ぜべきふ投すべし若し夫れ當時の輿論果して勤王ふ切ふきを何を取て之を我口ふ藉かさんや然るふ其茲ふ出てすして耶穏宗ふ據る以て當時勤王の說世上に洽ゆらさるを知るべし其後十四年を經て二千三百十一年ふ至りて由井正雪丸橋忠彌の亂あり正雪固より死を恐れずして奥名を萬世ふ傳へんとすふ者なれを若し夫れ勤王の說すして當時ふ成ふらんふを何を之を口ふ藉きて人心を固結せしめはることあらんや然るふ其口ふ藉く所のものを之ふ出てそして却て德川氏の親藩紀州公ふ謀反ふ託を是れ又以て勤王の說未た成んふらはるを知るべし然るふ其後太平久しく打ち續きしうは當時の世体ふ最も必要なふ教則訓言の自ら發ぜるを自然の勢なを德川政府の組立て封建制度なを封建制度を破るものを不忠ふ心なを故ふ忠義の教太平ふ久しくふ從ひて社會ふ發成したり漢學の旺盛ふ至るふ及ひて其碩學鴻儒愈々之を鼓舞ふ出り蓋し孔子の教を素より封建の時ふ發したるものなり社を其君臣ふ分義を說くを恰も善く當時社會の結構を鞏固ならしむるふ適せるものあを加之物ハ見るものふ地位ふ從ひて異なるものなを德川時代ふ行なはれたる孔孟の教を忠義の事ふ切なるこを却て純粹なる孔孟ふ教なを甚しふものあるふ如しこれを

其所謂忠孝なるものは君主を為めに其身を犠牲にする意味にして其所謂孝なるものは父の為めに痛苦を忍ぶ意味にして其所謂孝なるものは父の為めに痛苦を忍ぶ意味にして蓋し是は中庸を得たるものにあらざるべし然れども封建制度を維持するに於て全く此心なきを時世の移るに従ひて此心愈々盛んなりき然りしかして英雄豪傑は士大夫の此心を鼓舞するにあり故に二千三百五十余年の頃水戸黄門光圀卿は此氣風を鼓舞するに蓋し光圀の主義は王室を尊崇し皇統の正統を立て佛教を排し臣民の分義を明らかにするにあり故に大日本史禮義類典の類を作らしめ又朱明の遺臣朱舜水を重聘して漢籍を勧め孔孟の儒道を擁護して頻りに忠義の教を奬勵せり然りしかして最も社會の人心に大感覚を与へたるは楠氏の墓を湊河に建て嗚呼忠臣楠氏之墓と記せし事なり是より先き楠氏の名望未だ世に顕はさず唯一二の儒者舊史を讀み其事跡を見て之を欽慕するのみ然るに光圀の楠氏此墓を湊河に建てしより村童牧兒も楠氏の人となりを知り勤王の人事の最も榮譽あるものなるを解せり其後久しからずして二千三百六十一年に至り赤穂の臣其主の為めに怨みを報じし事あり其事情の憐むべきと其進退の整備なるとに因りて海内一般其人を称賞し俳諧師名俳諧を讀み戯作

者を忠臣義士を作り儒者を義人録を著はし歌人詩人各々其長ずる所を以て其行為を賛美せり而して忠義は行ひ社會に尊ばるる時代なりき世人皆其刑に處せらるるを惜まざるものなかりしなり

此時代の前後に當りて彼の德川氏並に諸侯の内部に起りたる騒動も大に忠孝の氣を鼓舞せり夫れ亂臣賊子の君家を亂さんとするは封建制度を破潰せんとするの故に封建制度の時には當りて大逆無道として非行するものは之に過ぐるなし彼の姦計を企て善良惡人等を世人挙りて之を惡み其騒動を静めたる忠臣を世人挙りて之を賞したるは社會の風教愈々封建制度に適して發達せり

此時に當りて更に其勢を助くるものは演劇淨瑠璃小説等の盛んに世に行なはれたる事是なり是等のものは固より當時社會の風教を變へんと欲するの卓見を以て作り出せるものにあらず全く社會の風教を其儘に寫し出せるものとして見るべきのみ中にも其所謂勧善懲惡の主意たる一に唯當時に行はれる世論を示すに過ぎずと雖も忠義の氣益々勧むるものあり其記する所を見るに上は王室將軍諸侯の事より下は武士商人等の事に至るまで必ず臣僕の内に惡人あり其主家を覆し主人庸愚にして而して後忠臣出で又

數多の痛苦を嘗め其主家を改復したる此歴史なり大凡世人の感覺を發揮せしめ此等の著作より甚しきものなし此等の著作を見聞するものは皆其惡人を見て憎み其善人を見て憫み切齒扼腕するに至るその多し當時の著作そは惡人を非常の惡善人を非常の善とし人情に近ずくこと雖も當時の人情又粗なるを能く之を感奮せしめ得たりと見たり

さはれど社會に行はれ輿論を常に英雄豪傑の首唱なるが如きと雖も其實は當時の一般人民の利益あるものに外ならずはれり忠義の教何故に利益なるか是則ち當時の制度を封建制度にして君臣の關係を以て社會を立てたる折柄なれば忠義の教は最も必要維持せざるに適すれば彼の勧善懲惡の世の教の如きも必ずしも聖人の作りたるものにあらず愚夫愚婦の輿論集まりしものなれと思はるるなり

斯く忠義の説社會に發揚せらるるに及ひて大に徳川政府の封建制度と衝突せるに結果を發せり何んとなれば我國に於て忠義主義の最も大なるものは徳川氏に盡すにあらずして王室を尊ぶにあるが如き歴史の明らかなるに從ひて一般人民に知らしたるなり彼の光圀なるものは國を人心をして徳川氏に叛かしめんと欲するの意あるにあらず蓋し君に忠を盡すは善事たる

を知り而して人君の最も貴きものを天子は超ゆるを
きを知る故に忠を王室に盡せしその伐尊ひしあり赤
穂の義士の行為の如き其他演劇小説に記載する忠義
の士の行為の如きも皆其君に忠なるその分り其君に
忠なれば封建制度を肇固なるべしと雖も其君に忠
忠なれば其事竟に如何なるべきや蓋し忠義の教愈々
社會に著しく古昔王朝の威んなりし歴史愈々人智に
顯るべきは其所謂忠義の氣を其君に於てせそして
君の君に於てすべの正理を事を思ひしむ一固
の理學の上より論ずるとも其君に君たるそのを
全く我ふを因縁なきものなるべしと雖も人情の感觸

を決して然らざるべふり且つや人類貴賤の考を大に其
勢を助るものあり蓋し人情の尊敬する所は親しふ
らぬもに発するものなり抑も賢不肖の差を左すそ
其しきそのはあらざれば相親ぶもとなは尊しと思ふ
べい程の人とあらぬそのもとも其名聲を傳へ聞き
て親しく交る事のならぬとを與ふしく思ひれて自
ら人として尊重の念を發せしむるものなり（貴尊の念又生を保ち死を避くるの天性より発する理由は第四章世四章に詳なり）されば王室の平安の
都に在して凡て世間の政務に關係し王位すす深く隱退
せられたる有様を最も世の尊信を誘くの源因となれ
を殊に神代荒蒙の時より連綿として正經を傳へ王ふ

こと當時の歴史に明らかなれば我日本に天子のもはなり普天率土王土王臣ならざるなし中葉頼朝等黠猾のオを以て王權を攘み終に將軍政府の基を立てたれども雖も真正の神權と王室とのあるとの考へ漸く人民の間に發生せり

此事の第一の源因を和學に漸次に開化して神道の隆盛なるに始まり蓋し神道の説たるや王室の衰へ鎌倉政府興立の頃よりして休戚を為すに至れり後鳥羽院の時（十九百年代の中頃）卜部兼直神道大意を著せり其後度會家行類聚神祇本源を著せり南北朝の戰爭に時北畠親房元元集及び神皇正統記を著せり是に於て乎神道稍々形体

と為りそのあるに其後足利氏より戰國に移りて神道全く衰ふ書の見るべきなし德川氏海内を靜定するに及びて儒者ありて我國の古事に注意をなすのみ兼ねてこれを研究せり林道春山崎闇齋新井白石の輩皆著書あり而して闇齋の如きは深くこれを信ぜり然り而して和學者真淵本居平田等の諸子又熱心之を主張し我國を神國なりとして神の御子孫なる天位に登り玉ふ世界無比の尊き國たることを代人々に知らしめたり斯く神道に進むに從ひ皇統を貴ぶの氣從ひて盛んになれり宗門に熱心するもの何ぞ理論に關せん我皇室の御祖先なる神なりとの一論に迷信して勤王の氣又之より發生せりさ

れ々忠義の氣よりして終ふ勤王の氣を發生したり此氣漸く鬱結し終ふ高山彦九郎蒲生君平の輩ふ至りて最も王室の凌夷を歎き諸侯ふ説き士民を鼓舞して身命を顧みざるの熱心を示せり

二千五百年代の末に當りて儒者中又大ふ此の如き議論を主張したる者あり其人誰とそ賴山陽則ち其人なり蓋し山陽の主張せし所と神道と其主義を異にして却て神道を駁擊するが如きも其王室を尊崇するふ至りては遥に之に過きたり彼れ新井白石の讀史餘論を讀み皇朝の衰へ武權の興立する所以を知り頻りに之を慨歎し又楠氏の勲功を賞讃して其業の終に成らざるを哀み德川氏の政權を擅ふし王室の虛位を擁するを以て時勢の止むを得ざるものと言ひぬるふ論したり蓋し新井白石と古來の俊傑にして能く開化の理を知れるの故ふ古來政府の興廢する理を説きて德川氏を經緯せんとするふ於り賴山陽は即ち其事實ふ依りて更に勤王の主義を説くを識者或を其行爲を咎むと雖も亦一世の俊傑と爲さゝるを得ず況んや日本外史の一たび世ふ顯はるゝ社しより海内一般勤王の義を知り志士靡然として之ふ向ふの氣を發揮せるふ於てをや真に山陽外史の著書の如きて海内の人心を鼓舞せし事古來無雙と云ふへきなり著書を以て人心

を鼓舞するを得るに此の如きに至るまでは蓋し又時世の隆んなるに因らずんばあらず

然るに此時に當りて所謂勤王の氣なるものは亦た以て德川政府の結構を破壞するの勢力あるべきものにあらざるべからず然るに不慮に事件發出せり其之何ぞや二千六百年代の初め（一千五百十三年也）米洲の黑船太平洋を越えて我浦賀に著し通商貿易を請求せんことを是より先き外國の通商を三代將軍の時より固く禁止せられたれども海内一般殆んど日本に外に國あるを知らざるなり而して唯其名を聞くのみ支那朝鮮琉球の諸國はこれなり彼の佛祖に本地なる天竺の如き

或は天竺の外にあるべしと思惟せし者なり此時に當りて外國數々我邊海に寇せしことあるべからざる二千五百年代の後半に至りて外船の我近海に往來するもの數々あるべきを然るに皆我邊僻の地に上陸するあるのみ故に唯當時遂に大の志あるものなしのみをして之を怒憤せしむるに止まり然るに米船の我に到るや其入る所を則ち江戸近傍の地なり其求むる所は則ち條約を結びて通商せんことを試請ふにあり事大に前者に異なり而して彼れ之を要求するに強迫の意を以てし若し之を許さざれば直ちに兵力を上に訴へんと欲するの威を示せり

此の如き人民に對して此の如き事件の發するはて最も其勝を破るは是れ王室を直に巫祝僧侶に勅して外人の退去を祈らしめ幕府に直ちに炮臺を品川神に築き諸藩に令して武備を嚴にし且つ其の得失と建議せしめ加之詳語は通するものをして外國の事情を質さしめたり蓋し深暗の中にあるものを忽ち光輝を見るが直ちに眼を開く能はざるが如し彼の太平洋中に最小なる一孤島の内に閉居して絶て海外異邦の人と交通せざりし人民に此の如き事變に逢ひ其心神の惑亂するは抑も又理なきにあらず其第一の恐懼は外國と交通するとは彼れ直ちに我國を奪ふ一端なりと蓋し愛國の念は國に關する事件の生ずるに發するも此の如き恐懼の念は君に不利なる事件の崩壊し時に起るものなり今や外國將に我に交通を求むるは我國を奪はんとすと此恐懼人心に發し憂國の心非常に奮勃すり蓋し人心は其自ら苦しきを知るに切なり自ら慰むるを欲するは其自ら恐れざるときに切なり自ら強きを如く云ふものなり其自ら危きを覺ゆるときは切なり自ら尊大にして他の強者を罵詈するものなり彼の外船の我國に入るや其船艦の巍然たるを見て其砲銃器械の整然として精なる其兵制進退

の嚴然として靜なるを固より以て我國人を懼るに足るに足るべきのみ我國の砲銃と火繩銃のみ我國の兵制は二千三百年即ち元亀天正の頃はものゝみ故に如何に我を彼より強しとなして自ら慰めんと欲するも一日の民慰ひ難き事は顯あるなり唯一の慰ひ難きは當時盛んに發達せる日本を神國なり日本は天孫を神孫なり夷狄禽獣と同しからざるの事なり

水戸の會澤正志著新論に曰く謹て按神州者太陽之所出元氣之所始天日之嗣世世御宸極終古不易固天地之元首而萬國之綱紀也誠宜照臨宇内皇化所暨興有遠邁矣而今西荒蠻夷敢曜足之戰奔四海蹂躪諸國視猶掌上何其驕也地之在天中渾然無端宜如無方隅也然凡物莫不有自然之形體而有焉而神州居其首故幅員不甚廣大而其所以君臨萬方者未嘗一易姓革位也西洋諸蕃者當其殷盛時嘗船走刑英遠而不至也當時此類の文詩極多し

斯く民間の志士は熱心國事を憂ふに當りて德川政府の大權は二百六十餘年間太平の夢を結ひたる王侯貴族の掌握せし所なりを彼等を固とより最初德川政府を創立したる勇猛なる參河武士の子孫なりと雖も德川政府の太平を彼等をして其精神なる身体に至るまで全く柔弱ならしめたるを其の平生交る所は多く下臣のみなるを以て外國の使臣に對するも敢て怯臆することなく或は能く之を叱責するの勇氣を有したる者あるべし然れども此輩匹夫外國交際の何たるかを知らざるなり海關稅の何ものたるを知らざる

り裁判権の何ものたるを知らざるより通商交易の如何なる利益なるものたるやを知らざるを故に第一に開きたる談判を談判にあらずして寧ろ説諭を受けしものなり今之に抗せんとせば兵力に勝つべきなく辯論の勝つべきなし之を諾せんとせば人民の怨怒せんことを恐る是に於て徳川政府の企てたる第一の策を当時大に尊信を加へたる所に王室の威を藉り天子の詔を以て開港を行ひ以て一に人民に怨怒を鎮め一に外國の督促を緩ふせんと欲するにあるべき従来天子の詔は常に徳川政府の欲するはまふくなりき然るに此の如き方略に民間に傳播するや志士皆怨怒し慨歎の餘り「實力難深洋夷無」を論ずるものあり「此心甫欲掃戎夷」と唱ふるものあり「今日にして尊攘を議せざるは是れ國家の奸賊夷狄に醜奴のみ」と論ずるものあり其極や殆んど全國各藩の志士は憂愁胸に迫まりて家を捨て妻子を去り郷里を脱し生死をも顧みず嚴罰をも恐れず東西南北に奔走して偏に其熱心を以て所の攘夷の論を徹せんと務めたりきされど其論又縉紳の内に入りて王室の主義全く攘夷と決定せり而して徳川政府は之を翻さんと欲して幾回となく開港の議を上りたるも終に其意を達する能はざりき是時に當りて徳川十四代の將軍家茂尚幼にして一切

の政權皆大老井伊直弼の手に歸し其人皇室に說くに為すべうはあらざるを知りつゝ鎖港攘夷に迎も行ふ為すうらさふを思ひまゝに王室の許さざるを吾能く之を決行せん諸侯の服せざるは吾能く之を屈服せん民間の志士の罵るを吾悉く之を屠殺せん今日に日本の政處そは唯此一方あるを決斷し終に外國と條定約を結ひたる實に二千五百十八年春の事なり天下の志士は此舉措を見て皆憤然として恐れ怒りて曰く德川氏は吾人を以て外國の奴隷たらしむるものなり天子の命に背き日本國を陸沈せしむるものなりと嘆然之を非難して皆心を王室に歸せり

愛媛縣立図書館
学校教育

直弼謀て之を知り乃ち一網に打盡しつゝあるは世論益々之を怒り二百餘年人望の係もし政府も復一人の之を擁護する者なきに至るの實に開港に止むを得ざるを知るの俊士も雖も亦之に服せざるの多うきこの如き時に當りて此の如き舉動を行ふ人の良死を遂ゝさるゝ社會に理なを故に直弼遂に一私怨の為めに水戸藩士の手に死せり然れども彼既に德川政府と生身を犧牲にして外國と條約を結ひ以後如何に鎖港論者の政權を執るも容易に之を決行せざる能はざるを知るを蓋し亦國家に大功あるを云ふべし是より先き天下の諸侯及び志士を德川政府の終に頼

むへうらふを見て皆悉く王室に向ひ之に據りて以て鎖港攘夷を行ひ我神國を右て夷狄の奴隷たるを免れしめんとせり是に於て直弼等私に思へらく德川氏の人望を恢復し海内を右て靜寧に歸さしむるは唯公武を右て合体せしむるに如かず一事に為すと則ち皇妹東下の議を奏せり直弼死せるの後老中等庶政を一新し諸侯の妻孥を其國に歸し且つ公武の合体を希望し終に將軍をして上洛せしめ諸侯を京師に集め天子に目前に於て開鎖の大論を決せんと企てたり若し之を行ふの人を以て賢良ならんに斯の如き企ては當時に於て或を適合すべきものならん然れども其人の適せざるを如何せんや夫れ德川氏の三代以後天下の政權を專握するに至りしを決して之が政權を執りしものに賢良なるに因るにあらざるなり全く祖先の制定したる組織の完全なるに據り彼れ關東形勝の地に據り諸侯の質を擁して之を大城の内に集めて以て抑制するに因るなり故に其靜寧に歸したるものも畏上の制馭に據りて寧ろ外形上の制馭に據るその多きなりされば此の如き人を以て巍然たる大城の内に出て開豁なる廣野の外に逍遥し數々公衆の耳目に接せしめて威嚴地に墜ち政令遂に行はれざることを防ぐべからざるの勢なり是時に當りて德川

政府の内部ふも既に人材登用の論あるて復舊時の如きものふあらんと雖も如何ふせん未だ上位ふ居るものすでも變改すふに至らざるを故ふ其京師に出て他の諸侯と併列するや復外形上の威嚴以て其勢を添ふるの外に故ふ諸侯伏服せしむる能はず上洛の時に當りて隱然消散せり況んや此時に當りて關西諸國の諸侯の如きは早く既ふ外國船突入の激動に感して内部の改革を行ふ久々襲来せる門閥の弊を廢し憂國の志士を撰みて國事を任ずるを之と應對の際ふ於てそら數の軽蔑を免ふ能はざりきはまた王室をして德川氏ふ合せしめんとして企てたる將軍の上洛を

却て德川氏をして王室に屈服せしむる媒とふり天子石清水に幸し自ら將軍ふ節刀を授て攘夷を行ふもの大事件を發するふに至れり是時將軍病みて出ずる能はず代理の人亦疾みて出づる能はざる由りて其事遂に行はれざりしが德川氏内部の醜体是に至りて全く世に發露せり然れども此時ふ至りて王室ふ始めて攘夷鎖港の全く行ふべからざる事と知らるるに之より先き水戸藩最も鎖港を主張し一揆又其議を賛し以て德川氏の政略に抗したりされども王室を二侯及び其他の諸侯と關東ふ下りて攘夷を決行せしめらるるに及ぶ之を實行

そる能はざりさは是れ於て公武合体の目的始めて達するを得て而して攘夷鎖港を主張そる縉紳諸侯及び民間の志士大に勢力を失へり又徳川氏の威望も亦た人望を失せり豈久しく海内を制そる能得んや公武共に開港の主義を執る及びて鎖港攘夷を主義とせる民間の志士私に兵を執りて政府に抗そるものあり松本謙三郎吉村虎太郎等中山忠光を擁戴して大和五條に及し平野二郎但馬に及そ藩士の京師を騒擾するもあり長州人来りて京中に戰ふ諸侯の私に外國と戰ふものあり長州の人外船に發砲せしかば外國人怒りて之を撃ち馬關を奪ふ之より先き薩州亦英と戰ふ諸侯の内亂政府を煩はすものあり水戸藩に内乱あり相戰ふそるもの数年海内多事徳川氏殆んと之を制馭そる能はざるに至りて外國又頻りに償金を促し徳川政府は過失を咎めそり凡政治の難此時より難き者あらざるなし而て此等の事に悉く之を鎮定そる能はざりと雖も更に一驚際の乘そくき者を示せり之より先き長州藩毛利氏數々徳川政府の命に抗したり其所謂俗論黨なるもの恭順謹慎の意を致して多く謀に與る臣下を誅そるに及ぶに為めに徳川氏を之を寛恕そるに至れと雖も此時高杉晋作なる者の出で自ら兵を起して俗論黨を撃ち閥藩の議論を一新せんと為めに徳川氏を兵を發して之を滅ぼんと欲せり則ち從前の方法に因り一紙の命を傳へて地を割き若しくは封を

移そその能ひざるを察し征討の師を下ちて勝敗を試みんとせり是時に當りて長州も既に外國と一戰して大に兵制を改めたりされど其戰最も奇觀なりき鎖港攘夷を主張せる長藩は悉く洋式を用ひ輕裝して銃砲を携へ之を開港を主張し徳川氏の命を奉じて攻寄せる諸侯の兵と皆な元亀天正以來家傳の甲冑を着し錆びたる鎗を持ち齊せたる馬に跨りて其勝敗知るべきなり若し其は徳川氏をして全力を盡して之に向ひ点りて其長州を破ることを必せり然るに此時家茂將軍死去し内外多事なるを為めに催ほし長藩に諭ちて兵を退かしめ以て一時の苟安せり

秋田県立図書館

されど既に人望を失せる徳川政府を更に兵力に弱ふることを示せり故に茲に至りて徳川氏の所に已に政府たる其權力を失ひしことを因りて大藩外諸侯を勿論小藩譜代と雖も其命に從ひざるもの多うなりぬ其中土佐侯山内氏其臣をして十五代將軍慶喜に説かしめて曰く泰西人來航以來物議紛然東攻西擊殆んと寧歳なし恐らくは外國の輕侮を招かん是れ政令二途に出て天下耳目の屬する所を異にするを為めなり宜しく政權を王室に奉還し萬國と併立するの基礎を立つべしと將軍其説に容れて政權を奉還せり然りと雖も徳川氏の封領を削ぎ其臣下の多

き糧食の乏れる海内固より之と比すべきにあらず若し夫れ隱然關東に據りて唯々朝廷の命是に從ひたらんふ之を如何ともすること能はざるべし然れども薩長土等の藩臣ら朝廷に權を專らふするを見なるべし其命を奉ずるは人情の堪ふる能はざる所のものあらん終に伏見の變を發し一敗して關東に退くなり

伏見の一戰を天下の向背を決したるが如し然れども德川氏の尚ほ海内に強國を保ち失はざるを其陸軍の如きは當時最も熟練せるものなるべき海軍の如きは至つて他の諸侯常に之を有するものなし而して德川氏は開陽蟠龍回天以下數多の軍艦を有せり伏見の一敗を以て從來主要ふ當りしふ舟楫の俗物を排除するに幸機となりたるべしと雖も若し更に關左の兵を起して東海東山の二道を上らば天下の事未だ知るべからざるなり然るに此時外患方に深く干戈を邦内に動さべきの時にあらざるを故に將軍慶喜を勝安房大久保一翁の説を容れ自書臣下を戒めて曰く官軍に抗を保なる様官軍に抗するものは猶刃を吾に加ふるが如きぞと即ち江戸城及び軍艦銃砲を朝廷に献し而して身其命を俟てりされども堅守ふりし德川政府の組織も民間の輿論に抗しふ為めに開港後僅九年にして終に解体せるに至りしは當時の輿論

より鎖港攘夷の一論の如きを何ぞ必ずしも策の得たるものならんや今日三尺の童子も尚ほ其非なることを知るべし徳川氏の終始開港を是とせざりしは國家に大功ありと云ふべし然れども此の如き固陋なる輿論も尚ほ且壓服するを能はずして却て自ら倒れるに至る國家の大權を執るものにして此理を解せざるときは徒に社會に風波を生ずんのみ徳川氏の如きを好亀鑑を社會に遺したりと云ふべし

然れども外交一たび開きて而して徳川政府の制度を永遠に保持するを到底望むべからざるなり蓋し徳川氏の制を諸侯及び人民の反亂を防ぐに於て最も緻密なる所あり故に二百五十年の久しきを一諸侯の叛くものあるなし然れども海内連合して外敵に向ふの時に至りてを封建制度の區畫全く無用のものとなれるを古語に曰く同舟颶に逢へば吳越相救ふと故に秦兵強き時は六國連合し佛兵強きときは英日連合す其連合の時に當りてや固より六國ふく英日ふく好の外船の突入するや日本人民の恐怖せしを實に非常なりき故に封建の分子は此時早く既に破滅し彼の族を重んぜしの習氣全く社會を去れり諸侯の内部に於ても皆改革を行ひ皆日本國を思ふの人をして藩政を司らしめたり此時に當りて此等の人の心裏復其君に忠を盡さ

んとの念あらざるなり其藩代愛國の念あらざるなり全く日本國をのみ憂ひて少しく更に勤王の志を存せしものなし此の如き人物を豈是れ封建の人なりんや全く郡縣の人なるなりされど徳川政府を滅しなるを外面にては封建諸侯の力れるに如く思ひなれども其實は愛國の志士封建の遺物なる一團結に因りて其目的を達せしなりされど徳川政府の滅せし後四年に志て明治政府を遂に封建を廢して郡縣を為すと雖も海内一人の其君に忠なるものなきを以て之を抗せしなり蓋し之を聞く封建制度は滅ぶるや人民愛藩の念あるを以て愛國の心なし敵國外患の強きや愛國の心あるを以て愛藩の念なきを見れば則ち徳川政府の滅するや以て封建の滅するを知るべし然らば則ち其滅するや命なり何ぞ必ずしも責を一二執政者の過失に歸すべけんや

跋

明治復績百度皆新天下之事
率取法於西國焉獨史籍之體
全拾仍舊貫雖浩何補吾友
鼎軒田口君夙通經濟之學觀
史有感眼嘗慨古今史乘之無

明治十一年二月廿六日版權免許
同十五年十月出版
著述兼出版人　静岡縣士族　田口卯吉
東京牛込區牛込北山伏町四十三番地

東京
書林
賣捌

日本橋通二丁目　北畠茂兵衛
同　通二丁目　稲田佐兵衛
芝三島町　山中市兵衛
淺艸茅町三丁目　北澤伊八
小石川大門町　青山清吉
日本橋通三丁目　丸屋善七
同　通二丁目　小林新兵衛